

真のグル、サイはどのようにして私を真のバクティへ導いたか？

S・サイ・ギリダール氏

S・サイ・ギリダール氏は、1999年に第11学年〔15才以上〕からプラシャーンティ・ニラヤムのシュリ・サティヤ・サイ大学小中高等部に入学しました。彼はプラシャーンティ・ニラヤムのキャンパスにあるシュリ・サティヤ・サイ大学で学びを続け、2006年、最終的に大学で理学士と理学修士（化学）を取得しました。その後バガヴァンのお導きにより、哲学修士（M. Phil）課程に加わり、2008年に修了しました。それからは、臨床化学の分野で「Lp-PLA2:アジア系インド人の冠動脈疾患における役割とナノ・バイオ・センサーを使った新しい検出方法に関する研究」をテーマとする博士号の調査研究に着手しました。

数十年もプラシャーンティ・ニラヤムを訪れ続けている家族に生まれた彼は、バガヴァンから2つの重要な儀式——アクシャラビヤーサ（幼子が読み書きを始める儀式）とウパナヤナム（聖紐式）——を執り行って頂いただけではなく、バガヴァンが名付け親であるという幸運の持ち主でもあります。

かつてスワミは、バジャン・ホールで学生たちに「バクティとは何ですか？」と尋ねられたことがありました。1人の学生が「スワミ、バクティとはあなたに対する愛です」と答えました。するとスワミは「そうです。それが正しい答えです」とおっしゃいました。

ですから、バクティとは神への愛なのです！

ヒマラヤへの数回の旅の中で、私は真摯なサーダカ〔靈性修行者〕たちに出会う好機がたくさんありました。彼らは自己〔真我〕の発見、すなわち神を愛することに人生を捧げた人々でした。私は、常々自分を悩ませていたある質問をしました。「なぜ私の靈性修行は首尾一貫していないのでしょうか？」

興味深いことに、サーダカたちは皆、口をそろえてこう言いました。「あなたの世間への愛が、神への愛よりも大きいからです」。この答えによって新たな疑問が生じ、それが私の頭から離れなくなりました。「私はどのようにして神を愛せばよいのだろうか？」

この疑問に対し、何一つ満足できる答えを得ることはできませんでした。

『神を愛する方法』 — シュリ・ラーマクリシュナからヒントを得て

かつて、私はスワミ・ヴィヴェーカーナンダに関する映画を見ていたのですが、その中であるシーンに強烈なインパクト〔影響〕を受けました。ナレン〔ヴィヴェーカーナンダ〕が、同じような質問を持ってシュリ・ラーマクリシュナ・パラマハンサに会いに行きます。ナレンは師（タクル：ラーマクリシュナの呼び名）に、どうすれば神のビジョンで歓喜に満たされ、ラーマクリシュナ・パラマハンサがしているように自然に神を愛することができるのでしょうか？と尋ねます。

1匹のイエ蠅がジュースのコップの周りを飛び回っているのに気づいたタクルは、こう言います。「このイエ蠅を見てごらん！ ジュースのコップの周りを飛んでいるだけでは決してジュースを味わうことはできない。この蠅がジュースの甘さを味わえる方法はただ1つ、ジュースの中に飛び込むことだ。その過程で、このイエ蠅は自分を失うかもしれない。だが、それが唯一の方法なのだよ！」

タクルの言葉から、私も自分なりに解釈して答を見つけました。第一に、私はただ境界線上をあちこち飛び回るのではなく、宇宙の不確実性の中に飛び込んでいく必要があります。



第2に、その過程で私が自分を失う可能性は十分にあります。目的地に辿り着くことを信じて旅している者にとっては、恐ろしいことです！ 私の頭にはまだ不確実性が大きく立ちまわっていました！ 宇宙の類ほどではありませんが。

正確には崖っぷちがどこなのか、どこで、どうやって飛び込めば良いのかわからないまま、私は心の旅を続けました。時にはナスマラナを試みたり、時には自分が瞑想だと考えているものを試みたり。私の時間の一部はある1つの霊的活動に費やされ、また別の時間は別の霊的活動に費やされました。いつの時も、どの活動が真に神を愛するための媒体になる

のかわからないままに。焦燥感と不満がつのって行く中、私はシュリ・サティヤ・サイ大学のある年長の教師の経験を耳にしました。

神から絶え間ない恩寵を得る方法

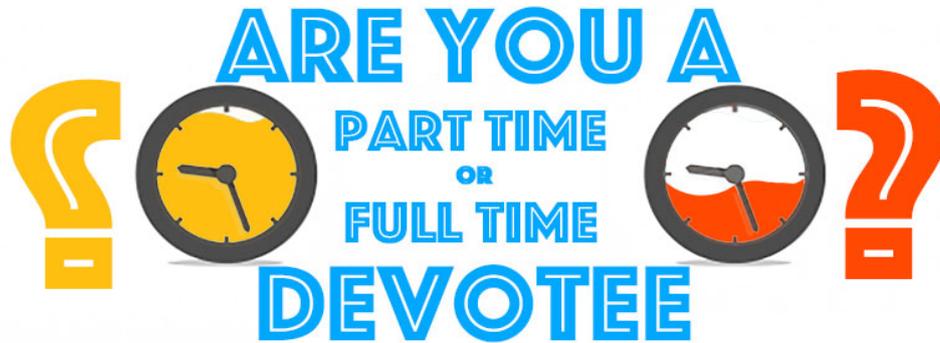
かつて、スワミはプッタパーティの学校や大学のすべての教師と学生を、ブリンダーヴァン〔バンガロール近郊のホワイトフィールド〕のアシュラムへ呼びになったことがありました。新学期が始まる前に、彼らに祝福を与えるためでした。そこにはもちろん大勢のブリンダーヴァンの学生たちもいて、誰もが最も待ち望むバガヴァンとの『トライー・セッション』の特権を享受することを楽しみにしていました。

学生たちがこのセッションの恩恵で祝福をお与えくださいと懇願すると、スワミははっきりと神の方程式を示されました。「なぜ君たちにトライー・セッションを与えなければいけないのだね？ 君たちは皆、パートタイムの信仰しか“見せて”いないではないか。私がほしいのはフルタイムの信仰です！」

われらのマスター〔師〕は、マスターストローク〔絶妙な神業〕を見せてくださいました。スワミは近くに座っていた年長の教授にお尋ねになりました。「あなたは会社で働いたことがありますね？」 その教授は「はい」と答えました。

次に、スワミは教授に「あなたの会社にはどのような種類の従業員がいましたか？」とお尋ねになりました。教授は、「臨時雇用(テンポラリー)と終身雇用(パーマネント)の2種類の従業員がいました」と答えました。

そこで、スワミはお尋ねになりました。「給料の面でこの2種類の従業員の違いは何ですか？」 教授は答えました。「臨時雇用の従業員は日給単位で支払われます。一方、終身雇用の従業員は、基本給、HRA(住宅手当)、定期昇給、それにボーナスもある支払い体系になっていました」。すると、スワミはこうおっしゃいました。「それと同様に、終身(パーマネント)の帰依者に対して、私は絶え間ない恩寵を降り注ぎ、ボーナス、そして最も大切な『親愛の情という手当』を与えます。それだけではありません。彼らのその後の人生のために年金も与えましょう。しかし、誰も終身(パーマネント)の帰依者になることに興味はないようです！」



礼拝者と帰依者

このバガヴァンの甘美な言葉を聞いて私が理解したことは、私はせいぜい礼拝者か臨時の帰依者でしかなかった、ということです。礼拝者と帰依者の違いは、礼拝者はどんなに熱心に真面目に神を礼拝していても、自分の欲望や個人的恩恵の達成が根底にあることです。一方、帰依者は神を愛するのに理由を持ちません。おそらくこれが、スワミが『愛に理由はなく、愛に季節はなく、愛に誕生も死もない』と歌っておられるゆえんです。この違いをわかりやすく表している古典的な例は、偉大な礼拝者であるラーヴァナと、偉大な帰依者であるハヌマーンのそれぞれの人生です。

ヴィバクティからバクティを理解する

近ごろ、私はバガヴァンのある素晴らしい帰依者から、これまで聞いたこともないバクティの美しい意味を知ることができました。スワミはバクティを『神からのヴィバクティがない状態』と定義なさっています。サンスクリット語で「ヴィバクティ」とは分離、もしくは分割を意味します。バクティとは文字通り、「分離がない」という意味なのです。

指で数字の2を示すように言われたら、(インドでは)人差し指と中指を離して突き立てます。しかし、もしこの2本の指をまったく隙間なくくっ付けると、それは2つではなく1つになります。それがバクティです。神と神の帰依者がいるように見える一方で、彼らは常に1つの状態です。明らかに2つに見えるものが1つに融合することもヨーガと呼ばれます。そして、分離はヴィヨーガです！

このことを知った途端、2004年にスワミと交わした会話の意味がわかり始めました。それは、9月18日のガネーシャ・チャトゥルティー祭の日のことでした。私たちは、『ナヴァヴィダ・バクティ〔9つの信愛の道〕』をテーマにしたプログラムを準備してバガヴァンを訪れました。

スワミはそのタイトルを聞いておっしゃいました。

「ガネーシャはナヴァヴィダ・バクティを超越していると言いたいのかね？」

それから、こう付け加えられました。

ヴィナーヤクディニ グディ ロー マートラム チューステー アッカデー カニピスタール
ヴィナーヤクデウニ ニー アートマ ルーパム ロー チューダーリ
アッパデー ミール エッカダー ヴェツリナー アッカダ ウンタール

もしヴィナーヤカを寺院の中に置かれているだけの存在だと思うなら、ヴィナーヤカはあなたの前にそのようにしか現れないだろう。ヴィナーヤカをアートマン〔真我〕として見るべきである。そうして初めて、神に至るところを見つけることができるだろう。

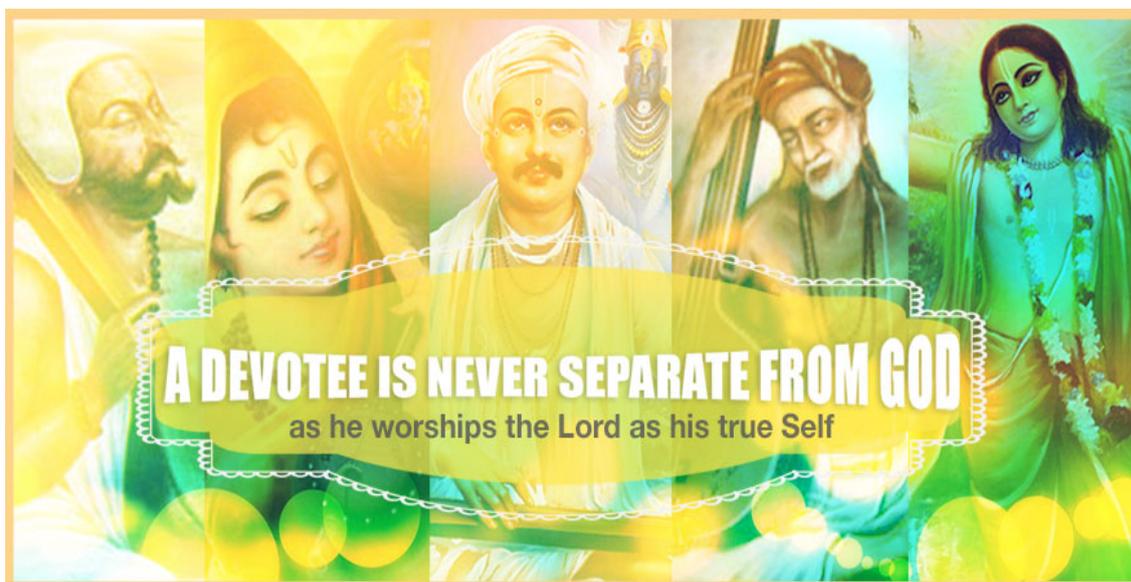
スワミは実際のところ、礼拝者と帰依者の違いを教えてくださいました。帰依者は決して神と離れることはありません。なぜなら帰依者は、神を自分の真の自己、すなわちアートマンとして崇めるからです。バクタ（帰依者）は愛する神の栄光を歌っている時ですら、愛する神は自分たちと離れた存在ではなく、自分たちの真の自己であることを常に自覚しています！ この点では、カビールの2行連句やミーラーの歌、トゥッカーラムのアバंगा（ヴィッタラ神を称える歌の一種）はすべて、存在しているのは自分自身だけであり、存在しているのはクリシュナ、ラーマ、サイ、神、サッドグル、これらすべての名を含んだ一なる自己だけである、という高尚な真理を伝えていることがわかってきました。

そしてようやく、私はシュリ・ラーマクリシュナ・パラマハンサの言葉を理解しました。

(a) 宇宙の不確実性に飛び込むというのは、神から切り離された自分という考えを超えたところ、肉体と心〔マインド〕を超えたところ、そして別々の名と姿を超えたところに飛び込んでいくという意味である。ためらうことなく「神は至るところに存在する」と言うのであれば、どうして私の中に神が存在しないことがあるだろうか？

(b) その過程で自分を失うとは、私のアイデンティティー〔独自性〕を私の愛する神、サ

イに融合するということである！ ガンジス河やゴダーヴァリー河はそれぞれ別のアイデンティティを持った河であるが、いったん大海に融合してしまえば、もはや個々の名前や姿を持たない。たとえ、それまでどれほど神聖な河であったとしても！

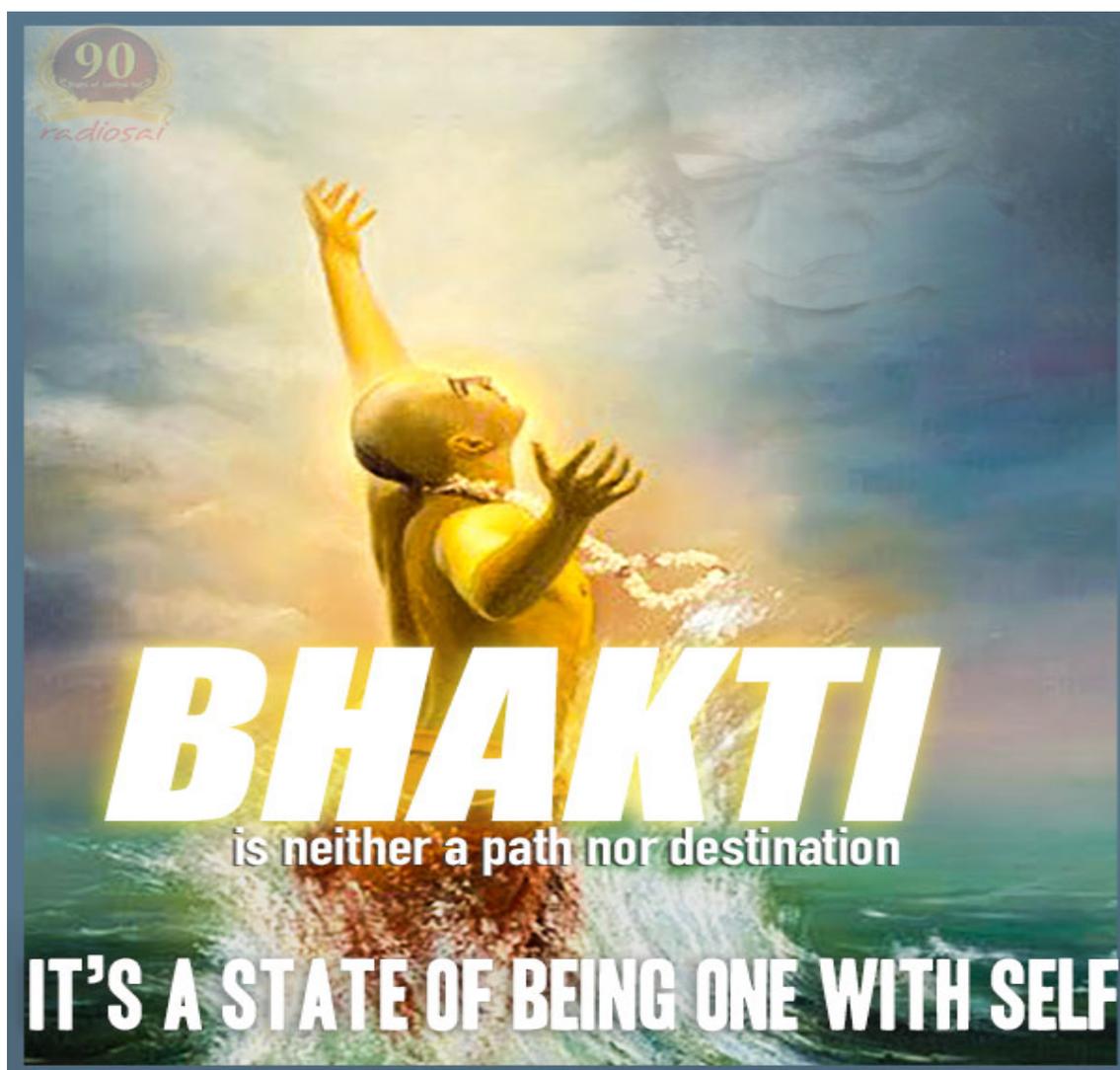


スワミは Sai の“Sa”という音節は神性を表しているとおっしゃっています。そうであれば、“Sai”とは単に小さな“i”（自己）が、“神性”すなわち“Sa”に融合しているという意味ではないでしょうか？ このことが起こるための唯一の方法は、「私」という真我の完全な理解、完全な体験を手に入れることです。それはサッドグル〔真の導師〕だけが与えることのできる直接体験からくる理解です。

真のグルの恩寵を得る過程

「どうすれば、人はサッドグルの恩寵を得られるのか？」というのは、私の熱望する自明の疑問でした。スワミの御言葉をお借りすれば、それは「チャーラー スラバム（とっても簡単）」です！ 心と体で行ういかなる行動も、自分自身、すなわち親愛なる神、サイを喜ばせるためだけに行うべきなのです。他の対象や目的のためではありません。これは、私たちが誰かを愛した時にすることではないでしょうか？ 何をするにせよ私たちは愛する人を喜ばせるためにそれをしませんか？ これは、呼吸、食事、入浴、着替え、勉強、仕事、その他ありとあらゆることを含んでいます。そうすれば、すべての活動がサットカルマ（高潔な行為）に変わります。サーダナ（霊性修行）の文字どおりの意味は、サー（神の）、ダナ（富）です。いったん神の銀行の預金高がサットカルマを通して十分貯蓄

され、時が熟せば、サッドグルの恩寵は自然にやってきます。しかし、ただ霊的な預金高が多ければそれで良いというわけではありません。神の銀行の出納係が私たちの求める究極の富を与えるには、ラーガン（神に対する熱烈な思い）とエーカーグラタ（神のみに集中すること）という小切手を、神の預金窓口、つまり神の住まわれる場所に預けなければいけません。その場所はフリダヤ（慈愛に満ちた私たちの霊的ハート）です。



このことは、よく知られた次のミーラーのバジャンの中で説明されています。

アイスイー ラーギー ラガン、ミーラー ホーガイ マーガン、
ヴァフトー ガリー ガリー、ハリ グン ガーネー ラギ

ミーラーが持っていた熱烈な切望は、至高の至福へと変容しました。そして、彼女がずっと歌っていた歌は、本当はミーラーの真我であるクリシュナとの融合から生じた超越的な

至福の現れだったのです！ この文脈のハリという言葉には比類ない意味があります。ハリ マタラブ ジョー サバコー ハレタ ヘ [その中で、すべてのもの——ジャーグラタ (覚醒状態)、スワプナ (夢見状態)、スシュプティ (熟睡状態)、トゥリーヤ (第4番目の状態、純粹意識) ——を破壊する存在]

サッドグルとは誰のことでしょう？ サッドグルは有形でも無形でもありません。サッドグルはすべての二元性の感覚を超越しています。実際、それはグルという言葉に表されています。グはグナティータ (特性や属性の超越) を表す「グ」です。ルはルーパヴァルジタ (姿形のないもの) の「ル」です。グナ (激性、鈍性、浄性) 自体には形がありません。スワミは「グナの超越」という言葉によって、グルは無形さえも超越しているという真実を強調していらっしゃるのです。そのサッドグルは、自分を愛するために自分から自分を切り離されたのです。

スワミはラーダーのバクティ [信愛] について説明なさったことがあります。スワミは学生たちに、ラーダーの人生は「分離の中の結合と結合の中の分離です」と述べられ、「今言ったことを学生たちは理解していますか？」とお尋ねになりました。学生たちが説明を懇願すると、スワミは詳しく説明してくださいました。「肉体のクリシュナと離れている時、ラーダーはいつもクリシュナ、すなわち彼女の真我と1つでした。しかし、肉体のクリシュナが彼女のそばにいと、ラーダーはあまりにもクリシュナに仕えることに夢中になり、クリシュナという“ラーダーの真我”のアイデンティティー [自己認識] から離れてしまったのです！」

そういうわけで、私の理解では、バクティは本当に道や目的地などではなく、自分の真我と1つになった最も自然な状態、もっとわかりやすく言えば、私である真我を愛することなのです。私が私の真我であるためには、何をする必要がありますのでしょうか？ たとえ一瞬たりとも、私は“真我”と異なるものだ、とか“真我”とは似ても似つかぬものだ、という考えを心に抱いてはならないのです。

ラジオサイチーム

http://media.radiosai.org/journals/vol_13/01JUL15/How-Sadguru-Sai-Guided-Me-Towards-True-Bhakti.htm